

今、東京オリンピックがどうなるかということでコロナ禍のことと共に社会で高い関心もたれていますね。私も個人的にはスポーツは大好きですので持てたら良いのにと思ったりしています。以前、ある一流のプロ野球選手がインタビューを受けているのを見る機会がありました。バッターですがスランプで全く打てない時はどうするのですか？という問いに対して、「いつも昔からやっている素振りとかティーバッティング（ボールを置いて打つ）を何百回もします。そしてコーチに見てもらったりすると自分では全く変わっていないと思っていても微妙に変わっていることが分かるのです。」といったことを話していました。信仰生活も同じだと思えます。たとえ、何年経っていようと、いや何年も経っているからこそ何も変わっていないと思っていても考え方や捉え方が変わっていたり、聖書からずれていたりしているかもしれません。その意味において分かっているつもりの信仰生活をもう一度見直してみることは大切だと思います。その中でも、今日は信仰生活の中で「交わり」ということを取り上げたいと思います。「交わり」ということばは一般にはあまり使われていなかったり、使われたとしても一般とは違った意味であったりします。これは英語で“fellowship”（フェローシップ）と訳されるので、日本語で「交際」するとか「お付き合い」という意味だと考えられがちですが、聖書では、それ以上の意味を持つ言葉として使われています。ギリシャ語では「コイノニア」と言います。最初に出てくるのは使徒 2:42 です。「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた」とあります。「堅く守り」とある言葉は、「使徒たちの教え」だけではありません。「交わり」にも、「パン裂き」（聖餐）にも、「祈り」にもかかる言葉です。つまり初代教会は、「使徒たちの教え」や「パン裂き」、「祈り」とともに「交わり」を何よりも大切なものとしていたのです。意識してもらっていたのです。

先ず第一に「交わり」には、同じものを一緒に持つ、「共有」という意味があり、それは、まずは、目に見えるものを共有することを意味しました。使徒 2:44-45 に「信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた」とあります。きょうの箇所にも「信じた者の群れは、心と意思を一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた」使徒 4:32 「彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従っておのおのに分け与えられたからである」使徒 4:34-35 とあります。この時、少なくとも 3 千人以上が信徒となったわけですからずいぶん大掛かりなものだったと思います。ただ、こうした大規模な救済制度あるいは社会保障制度は、聖書を見ますとエルサレムで教会がはじまった初期のころだけしか行われず、使徒たちがエルサレムから追放された後は規模が縮小されました。しかし、お互いが、自分の持っているものを分かち合って助け合うことは、エルサレムだけでなく、各地の教会でも行われました。例えば教会には「やもめの名簿」というものがあり、彼女たちを援助する制度がありました。また、奴隷の身分の人が、自分自身を買い戻し、自由人になるのを援助する基金があったことも知られています。そして、そうした基金に献金したり、物を分け与えること自体が「交わり」（コイノニア）とも呼ばれていました。

今日では、福祉の働きは、行政が税金を原資として予算を使って行っていますが、それですべてがカバーできるわけではありません。NGO をはじめ様々な団体が、行政がカバーできない必要に応えようと働いています。しかし、多くの場合、私たちに必要なのは、小さな援助だと思います。教会の「交わり」はそうした助け合いを提供してくれます。金銭や品物だけでなく、自分が持っている技能や、ほんの僅かな時間を分け与えること、誰かに話を聞いてもらうのではなく、誰かの話を親身に聞いてあげるだけで教会

の「交わり」に加わることができるのです。そのような意味で、誰もが、何かの形で、この「交わり」に参加することができます。神は、私たちすべてにこの「交わり」の恵みを体験するよう願っておられます。

第二に、「交わり」は、「信仰の共有」を意味します。同じ信仰を持つ者たちが、その信仰に基づいて、互いに励まし合い、祈り合い、ともに礼拝と奉仕をささげることが指します。よく、礼拝は神様に自分が向き合う時で交わりの時ではない。交わりは礼拝が終わってからという声を聞くことがあります。その場合、一緒に食事をしたり、おしゃべりしたりすることを「交わり」と考えておられると思いますが、それなら、礼拝が終わったらすぐ帰らなければならない人は、どんな「交わり」にもあずかれないのでしょうか。あるいはネットで礼拝を捧げている方には交わりは無いのでしょうか？ そうではありません。礼拝そのものが信仰の交わりなのです。礼拝に来る人はみな、共に礼拝をささげることによって、信仰の交わりにあずかっているのです。また、共に祈ること、互いに祈り合うことも信仰の「交わり」です。パウロは手紙の中で何度も「私のために…祈ってください」と書いています。パウロは、他の人のためには祈ってあげても、自分のことは祈ってもらわなくてよいなどと考える人ではありませんでした。彼は、使徒という重い責任を果たすのに、どんなに他の人々の祈りが必要かをよく知っていました。

私たちもまた、他の人々の祈りを必要としています。誰にも祈ってもらわなくてよい人など、どこにもいません。主イエスは私たちのためにとりなし、祈ってくださいます。私は、自分ひとりで自分のために祈ったときよりも、他の人にも祈りをお願いしたときのほうが、より早く神に聞いていただけたという経験があります。また、私たちは、人々の祈りとともに、人々の励ましも必要としています。人は誰も、他の人からの励ましを必要としています。信仰者はなおのことです。信仰とは、目に見えないもの、まだ見ていないことを確信することです。たとえ、そこに混乱しか見えなくても、そこにも神がおられ、すべてを治めておられることを確認することが「信仰」です。苦しいことやつらいことばかりが続く中で、この苦しみの後にはかならず幸いがやって来ると信じて待ち望むこと、それが「信仰」です。しかし、私たちはどうしても、今、見えるものに心が奪われてしまい「信仰」を失くしてしまいがちです。だからこそ、互いに信仰を励ましあう「交わり」が必要なのです。私たちの信仰の生涯は神の国を目指す旅にたとえられます。まだ見ぬ神の国を信じて、この世を旅するのですが、もし、ひとりでその道を歩かなければならないとしたら、誰も神の国に到達できないでしょう。私たちは、同じ神の国を目指す蜚池聖書教会神の国ツアーの一員として、互いに信仰を励まし合ふことによって、はじめてそこに到達できるのです。それが教会の交わり、信仰の交わりです。今は、コロナ禍ですので以前のように気軽に集まったり、話したり出来ません。「交わり」が制限されてはじめて、私たちは、礼拝に集まり、互いに祈り、励まし合うことがとんなに大切なことかを改めて知るようになりました。それをもっと大切にすべきだったと反省するようになりました。これから、心配なく一緒に集まることができるようになった時には、その機会を無駄にせず、信仰の交わりのために活用し、互いの「交わり」をより豊かなものにしたいと思います。

さて、第三に、「交わり」とは「キリストとの交わり」を意味します。コリント第一 1:9 にこうあります。「神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。」「キリストとの交わり」、それはいったいどういうことでしょうか。

聖書は、キリストを信じた者は、キリストと一つになり、キリストとともに十字架で死に、キリストとともに復活することによって救われたと教えています。エペソ 2:4-6 にこう書かれています。「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛して下さったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちがキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——キリス

ト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」イエスが十字架で死に、復活されたのは、今から二千年前のことです。どうして、今、生きている私たちがイエスとともに死に、イエスとともに復活したと言えるのでしょうか。時間や空間の中にいる私たちには、どうてい考えられないことです。しかし、時間や空間を超えて存在しておられる神にとっては、不思議なことでも何でもありません。私たちには自分で自分を救う力がありません。そんな私たちを、神はキリストと一つに結びつけ、キリストを通して、私たちを見てくださるのです。自分の罪のために何の償いも出来ない私たちがキリストを通して罪の償いを成し遂げた者とみなしてくださったのです。神は罪の中に死んでいた私たちが、キリストと一つにすることによって、キリストと一緒に、復活の力で生かしてくださったのです。神は、私たちがキリストと一つにすること、つまり、「キリストとの交わり」によって救ってくださったのです。

このように、キリストと一つにされることによって、救われたのなら、救われてからの信仰の歩みもまた、キリストに結ばれてこそ、はじめて可能になります。「キリストとの交わり」に入れられた私たちは、「キリストとの交わり」にとどまっています。キリストによって与えられた復活の命を体験することができるようになるのです。イエスはそのことを、「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」ヨハネ 15:5 という言葉で、教えておられます。ぶどうの木とぶどうの枝とは一体のもので、ぶどうの枝は、ぶどうの木から養分を受けて、実を結びます。枝は自分の力で実を結ぶではありません。ぶどうの木が枝に実を結ばせるのです。同じように、キリストにつながる者には、自分の力以上の、キリストの力が働き、神のために実を結ぶ人生を送ることができるのです。

ですから、私たちが実を結ぶための秘訣はただ一つ、ぶどうの木であるキリストから離れないでいること、「キリストとの交わり」にとどまっていることです。イエスは「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません」ヨハネ 15:4 と言っておられる通りです。「とどまる」ということばは「住む」「生活する」という意味です。キリストを信じる者がすでにキリストとつながっている、一緒に生きていることを意味しています。しかも、私たちがキリストにつながってくださったのは、神です。ですから、私たちのほうからキリストとの結びつきを断ち切らない限り、神は、私たちがキリストから断ち切ることはなさいません。「神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました」コリント第一 1:9、「あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちがキリストとともに生かし」てくださった。エペソ 2:4 と御言葉にある通りです。私たちは、キリストから離れては実を結ぶことができないことを自覚する謙虚な思い、何事においてもキリストに信頼する信仰があれば、それによってキリストとの交わりを保ち、その交わりを深めることができるのです。自分について、他人についてあれこれ悩む必要はないのです。

この「キリストとの交わり」から互いに信仰を励まし合う「交わり」や「分かち合い」が生まれてきます。また、逆にそうした信仰の「交わり」や「分かち合い」が、私たちの「キリストとの交わり」を育ててくれます。毎週の礼拝で、「キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わり」という言葉で祝福を受けるたびに、聖霊がくださる「キリストとの交わり」、「互いの交わり」、そして「分かち合いの交わり」が深められ、豊かになり、成長することを願い求めていきましょう。